

中学校教科書採択

子どもたちによりよい教科書を
現場の声は
反映されているか

夏休み中の8月6日、

教育研究所で、来年度から使用される中学校教科書の採択を話し合う教育委員会が開かれました。この会議は公開制のため、傍聴が可能であり、市教組をはじめ市民団体、教育関係者が早朝から参加しました。

同じ時期に行われる県内をはじめ各県の採択地区の会議が非公開のところも多く、その点ではさいたま市は透明性があるといえます。

しかしながら、ここ数年小学校の道徳やいくつかの教科については現場の声(調査研究)が圧倒的であったにもかかわらず、採択会議ではそれが反映されずに他社の教科書が採択されてしまったという経緯もあり、会議でのやり取りは市教組としても注目していました。さらに、検定は通過したものの、歴史や世界情勢を歪曲しているのではと疑念を持たれている教科書も採択の対象になっていることも注視されます。

採択会議の流れは、ひとつひとつの教科について、最初に調査専門委員会(各教科研究の代表者の集まり)から、すべての教科書についての特徴が報告されます。次に、選定委員会の推薦する教科書が概ね2、3社挙げられます。そして、学校の調査研究として、私たちが教科書展不況に赴き、短時間ながらも比較検討した教科書の研究所見が指導1課長から報告されます。その報告の後、教育委員が意見を述べて教育長が集約し、採択される教科書が決まっています。以前は、教育委員が投票するか、挙手をして採択を決めたこともありましたが、ここ数年は、話し合いの後、進行役の教育長が話し合いの動向を見て決めるような流れになっています。しかしながら今回の会議では理科の実験に関する掲載内容についての論議以外には、採択を二分するような論議の場面はなく、さらに、学校からの要望

(調査研究)がどの教科書が一番票が多かったのかは公表されませんでした。そのため現場の声が確実に反映されたかについては疑問が残りました。それでも、学力が高い生徒の方に目が向きがちな論議が続く中で「英語が苦手な子を救う、何とかするのが公教育の責務です」という発言や、道徳で「自由度が高い」教科書、「内容を」押し付けられない方がいい」と生徒の主体性を尊重するような選択基準の発言があったことは評価されます。採択された教科書は周知されていると思います。別表の通りです。

国語	教育出版	音楽一般	教育出版
書写	教育出版	器楽合奏	教育出版
地理	東京書籍	美術	日本文教出版
歴史	東京書籍	保健体育	東京書籍
公民	東京書籍	技術	開隆堂
地図帳	帝国書院	家庭	開隆堂
数学	啓林館	英語	開隆堂
理科	啓林館	道徳	学研みらい

注目された社会の歴史と公民の教科書、さらに、道徳の教科書は現行の教科書会社が採用されました。英語についても、日本による台湾統治に関連して治水事業に関わった八田與一が登場する教科書の採択が懸念されましたが、それには至りませんでした。(八田は台湾で尊敬される日本人として知られていますが、評価することで逆に日本の台湾統治が正当化される懸念があります。)

毎回、いくつかの教科書の採択では圧倒的な学校からの希望があったにもかかわらず、それを覆して予想外の教科書が採択され、これは教職員をはじめ市教組、市民団体の世論からも疑問の声が出されています。今回は、おおむね使い慣れた現行の教科書がそのまま採択

された結果となりましたが、それでもどの社が学投票で多数なのかははっきりせず、完全に現場の希望が生かされたのかは不透明でした。これはやはり学校希望の票数までの公表が望まれるところでした。これについては今後、開示請求の措置を

行うなどして明らかにしていきたいと思えます。今年の特徴としては採択会議の様子が公開されるようになった地区が増えたり、インターネット中継をして市民にも広く公開した政令市もあつたようです。

ちの実態、実際の教科書活用の場を一番よく知る私たち現場教師の希望が大きく反映されるべきです。さいたま市の透明性のあるシステムは継続を希望しつつも、さらに、現場の声がより反映されるような採択になることを強く望みます。

閑話

私自身戦争体験はありませんが、私の母は大阪大空襲で戦火の中を命からがら逃げ回り、一時は行方不明になり、あきらめた家族は母の位牌まで作ってしまった、というエピソードの持ち主でした。その母の運命がわずかでもずれていたら私の命がこの世になかったわけで、私は子どもころから戦争を憎んでいました。これが私の平和に対する意識の原点になっています。

私の戦争に対する思い

幼少の頃はまだ身近なところに戦争を伝える人物や事象が存在していません。銃弾により片目を失いながらも、自転車店を経営し、さらに町内の役員をしながら実に生き生きと活動されていた近所のおじさんの姿をたびたび思い出します。身長が足りず兵役検査で乙種のため召集を逃れた祖父は、住んでいた町(蕨市)での空襲を懐かしく、まるで他人事のように「焼夷弾が降ってくるのがキラキラとしてきれ」と語って

者が出ています。埼玉県の空襲の中では大きい方であつたそうです。家の倉庫にはなぜか焼夷弾の筒が置いてありました。空き地には防空壕に使った穴が残っていて、遊んだ記憶もあります。大宮駅では白衣をまとった傷痍軍人の方がアコーディオンで軍歌を奏でながら、行きかう人々から寄付を受ける姿も思い浮かびます。

戦後75年が過ぎた今年、太平洋戦争の風化が懸念されています。私は今でも6年生を担当すると、歴史の学習と併せて「祖父母への戦争体験の聞き書き」に取り組んできましたが、近年の特徴としては、祖父母はすでに戦後生まれの方がほとんどであるのに対し、曾祖父母が健在でお元気な方が多く、思った以上に身近な方から生の戦争体験を聞くことができます。今年担当の2年生の子どもたちも、多くの子が「ひいおじいちゃん、ひいおばあちゃん」がご健在です。夏休み前に、「もしできたら、戦争のことを聞いてみようね。」と投げかけています。休み明けの日記が楽しみです。☺